

第4回荒川水系流域委員会

議事要旨

日 時：令和6年10月30日（木） 14:00～15:30

場 所：羽越河川国道事務所1階会議室

開催方法：会議（Web 併用）

議 事

（1）規約の改正

規約の改正について承認された。

（2）荒川総合水系環境整備事業の再評価

委員：たんぼ整備後の経年的なトミヨの増減をどのように調査したのか。令和2年度から3年度で急激に減ったのはなぜか。

⇒事務局：捕獲調査を行っている。平成30年度以降は稚魚から成魚の調査に変更したが、今後は両方の調査を行う予定である。令和3年度はたんぼへの泥の堆積や、水生植物の繁茂による酸素不足などで個体数が一気に減少した。今後改善していきたいと考えている。

委員：たんぼの持続性はどうか。洪水のたびに壊れるものなのか。

⇒事務局：洪水があっても作り直すことがないように、再生・保全ができるようにしたい。半閉鎖型のたんぼで生息環境が悪化しやすく、開放型の方が土砂の堆積が生じにくいことがわかったため、半閉鎖型を開放側に改善するなどの整備を行っていきます。

委員：荒川は在来魚の種類が少ないが、たんぼには多くの魚が生息している。これまで整備したたんぼは、予期せぬ出水で環境が悪化したため、改善と事業期間の延長が必要である。これからも順応的な管理を行い、人がたくさん来るような川にしていきたい。

委員：CVM アンケートの有効回答が半分以下であることに違和感がある。理解していただけるようにアンケートを行う必要がある。回答者だけの問題にしない方がよい。

⇒委員：普段川に関心がない人には専門的すぎて難しい。説明資料が一般の人が自然に受け入れられる内容とするべきであり、次回改善されるとよい。

委員：川が死んだ状態で魚が減っている。環境を良くして魚のすみやすい川をつくってもらいたい。

⇒事務局：トミヨを指標として自然再生を行っているが、河川全体の瀬・淵なども含めて川を良くしていきたい。

委員：事業を令和 21 年度まで継続するのであれば参加する意義があると思う。会議の名称は荒川下流域とするとよい。上流域も魚がすめなくなってきたが、下流域だけの議論であれば、小国が参加する意味はない。

⇒事務局：上流域を視野にいれていないわけではない。

委員：河口から上流域までを一貫で考える必要があるため、配慮をお願いしたい。

委員：サケの遡上や放流はどのような状況か。

⇒委員：遡上については、今年は昨年よりも良い状況である。令和 4 年の洪水は関係なく、海水温の影響が大きいと思われるが、太平洋側より状況は良い。

⇒委員：海の環境変化が大きい。

委員：子どもたちの環境学習については、どのような状況か。

⇒事務局：小学校の防災教育は控えているが、水生生物調査に力を入れており、金屋小学校では、毎年 9 月に青空教室を開催している。

委員：学校の取り組みについては把握していない。下流域だけでなく水系全体を視野に入れて取り組んでもらいたい。

委員：荒川ではトミヨを指標としているが、全国的には何を指標としているか。アユは指標にできないか。

⇒事務局：魚や植物、鳥などを指標にしている事例があり、具体的には、サクラマス、ハクチヨウ、コウノトリなどがあげられる。

委員：(総括) 自然再生は、効果が持続するものであるべきである。洪水や普段の水の動きを捉えることができるようになっており、生物ではなく川の持続性を指標にする切り口もある。ヨーロッパでは、21 世紀末の社会の変容と人口と気候変動、これに併せて新しい環境の目標を設定している。流域の人たちが参加するような仕掛けをうまく作っており、流域の子どもたちが環境調査を行う例もある。荒川も目玉にできる環境の潜在力があると思うので、必要なものを取り入れていけるとよい。都市部の人荒川を訪れると環境の豊かさに驚く。外とのパイプ役となる移住者がいて、交流人口が増えていくことは流域にとって意義がある。水だけでなく、人が循環する仕組みも盛り込まれるとよい。事業再評価については、対応方針の原案に異議がないことを確認した。

(3) その他

事務局：令和 7 年度は、河川改修事業の再評価を予定している。

以上